

ISSN 2187-6177

日本語音声コミュニケーション 8

**Japanese Speech Communication 8**

2020. 3



日本語音声コミュニケーション学会  
Society of Japanese Speech Communication

製作 ひつじ書房

## 目次

発刊のことば

和文

論文

延伸ととぎれの機能

—日本語母語話者のデータから—

砂川有里子・佐々木藍子 .....1

論文

発話音調の役割と音調句の型

馬場良二 .....19

論文

マルチモーダルな観点から見た日中ビジネス場面の同調行動の異なり

楊一林 .....36

著者紹介

雑誌の案内(投稿の方法、連絡先)

編集後記

## 発刊のことば

日本語の音声コミュニケーションとその教育を専門に考える研究会「日本語音声コミュニケーション教育研究会」を、私たちが日本語教育学会のテーマ研究会として作ったのが2006年の4月です。7年目(2013年)に会誌を発刊し、11年目(2017年)に、日本語教育学会とは独立した学会になりました。それに伴い、研究会誌も第6号から学会誌になりました。

『日本語音声コミュニケーション』(英語名 Japanese Speech Communication)は、マルチメディアを駆使したオンラインジャーナルです。紙媒体の雑誌や本と違って、動画そのもの、音声そのものを掲載することができ、掲載されたものは世界じゅうで視聴されます。文字では書き表せないような、ちょっとした「日本的」な仕草でも、日本語を発音している被験者の口の中を撮ったMRI動画でも、日本語の教室の様子でも、世界に向けて発表することができます。

日本語の音声コミュニケーションとその教育に関する私たちの理解をさらに深め、研究を活性化していくために、本誌をご活用下さいましたら幸甚です。

2019年 3月吉日

「日本語音声コミュニケーション学会」代表幹事  
定延利之

## 著者紹介

**砂川有里子** (すなかわゆりこ)

筑波大学名誉教授

主たる研究分野：日本語の文法と談話分析

主要業績：『文法と談話の接点』（くろしお出版、2005）、『日本語教育研究への招待』（くろしお出版、2010）、『講座日本語コーパス5 コーパスと日本語教育』（朝倉書店、2016）

**Yuriko SUNAKAWA, Ph D.**

Professor Emerita, University of Tsukuba / Invited Scholar, National Institute for Japanese Language and Linguistics

Main topic of research: Grammar and Discourse Analysis of Japanese

Main publications: *Bunpoo to Danwa no Setten (Linkage between Grammar and Discourse)*. Tokyo: Kurosio Publisher, 2005. *Nihongo-kyoiku Kenkyuu e no Shootai, (Invitation to the Research for Japanese Teaching)*, Tokyo: Kurosio Publisher, 2010. *Kooza Nihongo Koopasu 5 Koopasu to Nihongo-kyoiku (Japanese Corpus Series 5 Corpus and Japanese Language Teaching)*, Tokyo: Asakura Publisher, 2016.

**佐々木藍子** (ささきあいこ)

国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員／立教大学兼任講師

主たる研究分野：第二言語習得

主要業績：『日本語学習者コーパス I-JAS 入門』（くろしお出版、2020）、「日本語学習者における接続助詞「～から」の発達過程」『国立国語研究所論集』第19号（国立国語研究所、2020）

**Aiko SASAKI**

Adjunct Researcher, National Institute for Japanese Language and Linguistics / Part-time Lecturer, Rikkyo University

Main topic of research: Second language acquisition

Main publications: *Nihongo-gakushuusha Koopasu I-JAS Nyuumon (Introduction to Japanese Learner Corpus I-JAS)* Tokyo: Kurosio Publisher, 2020. Nihongo Gakushuusha ni okeru Setsuzokujyoshi “kara” no Hattatsukatei (Development process of conjunctive particle “kara” in Japanese language learners). In *NINJAL Research Papers* 19 (NINJAL, 2020).

## 馬場良二 (ばばりょうじ)

熊本県立大学文学部日本語日本文学科教授

主たる研究分野：日本語教育

主要業績：『初級文化日本語』(文化外国語専門学校、1987)、『ジョアン・ロドリゲスの「エレガント」』(風間書房、1999)、『話してみらんね さしより！熊本弁』(熊本県立大学日本語教育研究室、2009)、『João Rodriguez 『Arte Grande』の成立と分析』(風間書房、2015)、訳『マクナイーマ』(トライ、2017)

## Ryoji BABA, Ph D.

Professor, Faculty of Japanese Language and Literature, Prefectural University of Kumamoto, Japan.

Main topic of research: Japanese Language Education.

Main publications: *Bunka Shokyū Nihongo (Basic Japanese of Bunka)*, Bunka Institute of Language, 1987), *Zyoan Rodorigesu no 'ereganto' ('Elegance' of João Rodriguez, Kazamashobō, 1999)*, *Hanashite Miran Ne, Sashiyori! Kumamoto-ben (Let's Speak Kumamoto Dialect!, Laboratory of Japanese Language Education in Prefectural University of Kumamoto, 2009)*, *Zyoan Rodorigesu Rodriguez 'Arte Grande' no Sēritsu to Bunseki (The Backgrounds of 'Arte Grande' by João Rodriguez and it's analyses, Kazamashobō, 2015)*, *MACUNAIMA* (translation, TRY, 2017).

## 楊一林

金沢大学大学院博士後期課程

主な研究テーマ：マルチモーダルコミュニケーション、中国語教育

主な論文：「中国社会における「ほめ」文化の変容：文化資源学の観点から」『金沢大学文化資源学研究』4: 120–126 (金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター、2012)、「中国大陸及び台湾におけるほめ行動の比較：目上へのほめ行動

を中心に」『金沢大学文化資源学研究』12 : 165-172 (金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター、2013)。

**Yilin YANG**

Ph D. student at Graduate School of Kanazawa University

Main topics of research: Multimodal Communication, Chinese as second language

Main publications: The transformation of the compliment culture in Chinese society: From the viewpoint of cultural resource studies. In *Kanazawa University cultural resource studies* 4: 120-126 (Center for Cultural Resource Studies Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University, 2012). A compliment comparison between mainland China and Taiwan: Focusing mainly on compliments to a superior. In *Kanazawa University cultural resource studies* 12: 165-172 (Center for Cultural Resource Studies Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University, 2013).

## 雑誌の案内(投稿の方法、連絡先)

『日本語音声コミュニケーション』(Japanese Speech Communication)は、日本語音声コミュニケーション学会の会員であれば、どなたでも投稿できます。(但し、会員以外からの投稿も査読委員会の判断で認めることがあります。)

研究会の「入会案内」については、下記の web ページをご参照下さい。

<http://www.speech-data.jp/nihonsei/apply.html>

「投稿要領」と「査読委員会会則」については、下記の web ページをご参照下さい。

<http://www.speech-data.jp/nihonsei/seika.html>

「査読委員会名簿」については、下記の web ページをご参照下さい。

<http://www.speech-data.jp/nihonsei/summary.html>

その他のお問い合わせは、下記までお願い致します。

定延利之(さだのぶとしゆき)(代表幹事)

sadanobu.toshiyuki.3x[at]kyoto-u.ac.jp ([at]の部分を@に変えてご送信下さい。)

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

## 編集後記

「これを召し上がれ」と言われたら、それを食べなくてはいけないことになりま  
す。来客に茶菓をすすめる場面で、格助詞「を」は動作の対象を限定する働きがあ  
るようです。

一方、友人間のくだけた会話で「何、食べる？」と「何を食べる？」との間に明  
確な意味の対立はないように見えます。違いは、前者の方がよりくだけているとい  
う発話のスタイルでしょう。

「これを召し上がれ」の言語的特徴は、述部の形式が命令で、発話の機能＝モダリ  
ティーが勧め、そして、指示詞が使われているということでしょうか。「何を食べ  
る？」は、述部の形式が断定で、機能が回答要求、そして、疑問詞が用いられてい  
るということです。

この場合の指示詞「これ」は、現場指示で目の前のモノを指しています。一方、  
疑問詞は話し手の知らないモノ／コトで、情報の新旧で言うなら新情報を求めます。

語用論的に内省すると、「これ、召し上がれ」は、遠慮しないでくれというメッセー  
ジであり、これであれ何であれ、それを食べろと言っているものではありません。

はてさて、格助詞の有無は、どのような場合に実質的な意味の対立を生むのでしょ  
う。

間違いなく言えるのは、日本語の中に格助詞があつたりなかつたりする言語があ  
り、一方で、格助詞が必須の言語があるということです。話し言葉では格助詞が省  
略されることがある、というわけではありません。格助詞の有無が意味の対立を生む  
言語は、それだけで一つの体系をなしているはずです。

そして、もう一つ間違いなく言えるのは、「これ、召し上がれ」は、来客に茶菓を  
すすめるという具体的な場面が前提となっているということです。現実世界の文脈  
から切り離して、「これ、召し上がれ」を分析することはできません。

「音声コミュニケーション」というのは、つまり、場面込みの言語活動ということ



です。「日本語音声コミュニケーション学会」は、それをことさらに名称としました。そして、『日本語音声コミュニケーション (Japanese Speech Communication)』は、音声や動画がそのまま呈示できる電子雑誌です。

着物姿の女性が妖しい笑みを浮かべながら、「これを召し上がれ」とやさしく勧めてきたら、毒が入っているかもしれません。でしょ？

馬場良二(査読委員長)



日本語音声コミュニケーション学会  
Society of Japanese Speech Communication

日本語音声コミュニケーション 8

Japanese Speech Communication 8

## インタラクティブ PDF 版

発行 2020年3月31日 初版1刷  
著者 日本語音声コミュニケーション学会  
<http://www.speech-data.jp/nihonsei/index.html>  
発行・製作 株式会社 ひつじ書房  
〒112-0011 東京都文京区千石 2-1-2 大和ビル 2F  
Tel.03-5319-4916 Fax.03-5319-4917  
郵便振替 00120-8-142852  
[toiawase@hituzi.co.jp](mailto:toiawase@hituzi.co.jp) <http://www.hituzi.co.jp/>

ISSN 2187-6177